令和6年5月28日発行　通巻226号

MAY. 2024 Vol.30

神奈川県立歴史博物館だより No.1

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

ヴェルヘルム・ハイネ＆エレファレット・ブラウンJr.
久里浜上陸図　石版彩色　1855年

異文化をまなざす …… 2
2024年は2つのコレクション展を開催！…… 6
THE けんぱく PUNCH　博物館公用車ドライバーの仕事 … 8

異文化をまなざす

違和感

“かれらはなにをしているのだろう？”

表紙に掲載した絵は彩色された縦64センチ横90センチほどの大型石版画です。私にとってこの大型石版画は受け入れから担当しているものであり、これまでたびたびみていたなじみのあるものです。ところが、それまでべつに気にもとめていなかったのですが、あるとき、ふと違和感がめばえました。

日本との通商条約締結を目的として、アメリカ合衆国政府が派遣した東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーが、初めて日本の地を踏んだ歴史的瞬間を描いたものです。にもかかわらず、最前列に描かれている武士や和船に乗ったひとびとはなぜ、アメリカ使節のほうを向いていないのでしょうか？

日本側の記録から、上陸地点を取り囲むように警備のため武士が配置されていたということが確認できます。確かに警備目的であるならば、周囲に目を配る必要がありますから上陸地点ではなく、絵のようにこちら側に顔を向けていてもおかしくありません。しかし、和船に乗ったひとびとは警備をしているようにはみえません。本来警備のために配置されていたはずのふたりの武士はおしゃべりをしているようにさえみえます【図1】。そうだとしたら、職務怠慢です。

そもそも、幕府はペリーが持参したアメリカ大統領書簡を受け取るにあたり、「陣中の作法」により行うことを命じていましたので、本来ならばもっと緊迫感のある状況だったはずです。

制作者であるドイツ出身の画家ヴェルヘルム・ハイネとアメリカ人写真師兼画家のエレファレット・ブラウン Jr. は日本をどのようなものとしてこの情景を見ていたのだろうか？どのように日本をまだみぬ海外のひとびとへつたえようとしたのであろうか？絵をみればみるほど、考えれば考えるほどいろいろな疑問がわいてきます。

【図1】久里浜上陸図（部分拡大図）

アメリカ全権ペリーと幕府との間で条約がむすばれてから今年で、170年目の節目の年に当たるということもあり、このたわいもない素朴な疑問にこたえようとはじめた研究の成果をベースに企画したのが、8月10日（土）から10月6日（日）までを会期とする特別展「かながわへのまなざし」です。

グローバル化

この展覧会は、1859年の神奈川（横浜）開港前後に来日した西洋人による絵画や写真などの記録を通して、当時のかながわの原風景を紹介するものですが、そもそも西洋人は日本をどのようにみていたのかというところからはじまります。

西洋と日本との出会いは、16世紀、室町時代までさかのぼります。コロンブスによるアメリカ大陸への到達に代表される、15世紀からはじまる大航海時代をリードしていたスペインとポルトガルは、海外進出を積極的に推し進めていました。とくに香辛料を求めアジアへとその勢力を拡大し、日本とも貿易を始めます。いわゆる南蛮貿易です。世界三大発明に数え上げられる羅針盤により、遠洋航海が容易になり、地球規模的な人の移動が可能となったのです。グローバル化が始まったともいえるでしょう。

当時「黒船」と呼ばれた南蛮船には舶来品が積み込まれ、商人とともにキリスト教の布教を目的としたイエズス会宣教師が乗り込んでいました【図2】。宣教師は、布教のかたわら日本の風俗や習慣などを記録し、ヨーロッパへ発信する役割も担っていました。しかし、彼らの活動の中心は九州を中心とする西日本に偏っていたため、東日本地域についての情報はほとんど記録されていません。また、日本側から与えられた情報も不正確なものであったので、たとえば宣教師により作成された日本の地図が全く不正確なままヨーロッパにつたえられ、地図帳に掲載されたりしています。

このように貿易と布教がセットで行われていましたが、17世紀半ば、江戸幕府はキリスト教を排除する

【図 2】南蛮屏風
紙本着色　江戸時代

ことを目的とし、キリスト教の布教をすすめていたスペイン、ポルトガル人の来航及び日本人の海外渡航を禁じました。いわゆる「鎖国」政策をはじめます。スペインとポルトガルが排除された「鎖国」下においては、通商が許されたオランダ、及び使節を派遣することが許された朝鮮や琉球を通じてしか、日本の情報は海外へ発信されなくなります。

当然、貿易を許されているオランダでさえ、出島内での生活を強いられていたわけですので、彼らが得られる情報は長崎周辺が主であり、それ以外の情報は数年間隔でおこなわれる江戸参府の機会に限られました。オランダ商館長付医師のエンゲルベルト・ケンペルはその機会を利用して長崎以外の情報も含め 1727 年に《日本誌》をまとめています。

描かれたかながわ

冒頭で紹介した絵に示されたように、ペリーの来航が新しい時代への転換を告げました。

ペリーはその当時アメリカ海軍が保有する軍艦の中でも最新鋭艦の蒸気軍艦ミシシッピ号でアメリカ東海岸ノーフォークから中国へと向かいます。そこで、すでに東インド艦隊に配備されていた蒸気軍艦サスケハナ号に乗り換え日本へ来航します。

1853 年浦賀に来航したアメリカ使節は、アメリカ大統領書簡を久里浜で幕府全権の浦賀奉行へ奉呈し、一度中国方面へ退いたのち翌 1854 年 3 月 31 日に日本と初めての条約を締結しますが、その間ハイネやブラウン Jr. にアメリカ使節が訪れた場所の風景や人びとを描かせたり写真に撮影させたりしています。そしてそれらの多くは、アメリカ使節の公式活動記録として編纂された *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*《ペリー提督日本遠征記》に挿絵として収録されます。

ペリーの日本初上陸、大統領書簡奉呈式の開催、条約締結といった数々の一大イベントが横浜周辺でおこなわれてることから、挿絵の多くは当然横浜周辺を描いたものが多くなっています。「鎖国」以前において情報発信源であったイエズス会宣教師が記録できなかった場所がはじめて西洋へつたえられることになったのです。

なお、興味深いのは、冒頭に紹介した《久里浜上陸図》と《ペリー提督日本遠征記》に収録されている挿絵の《久里浜上陸図》【図 3】に違いがみられる点です。当然、どちらも画家のハイネが制作しているわけですが、なぜこのような違いがあるのかを、解説文を参考に、ぜひ展覧会会場で実物をご覧いただきながら考えてみてはいかがでしょうか。

【図 3】ペリー提督日本遠征記の内 久里浜上陸図 1856 年

また、横浜に居留した外国人は、東は多摩川まで、南は三浦半島の先端部分を除いて、開港場から原則40キロ四方は自由に旅行することが、条約により認められていました。自由に旅行することを、当時「遊歩」といっており、来日外国人は余暇として横浜・根岸方面を散策したり、馬を仕立てて鎌倉方面に出かけたり、なかには大山登山を実行した旅行者もいました。これらの旅程は、イギリス人外交官であるアーネスト・サトウとともに、日本の旅行案内書を作成したG・W・ホーズが編纂した《横浜周辺外国人遊歩区域図》【図4】に記されています。そしてこの《横浜周辺外国人遊歩区域図》に記された旅程に準じて、開港後来日した写真家フェリーチェ・ベアトは撮影旅行をしたようで、鎌倉鶴岡八幡宮、長谷の大仏、厚木や原町田などの風景写真が遺されています。

グローブトロッター Globe Trotter

1858年にアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとあいついで締結した通商条約により、神奈川（横浜）が開港すると当然商人が来日しますが、あわせてグローブトロッターと呼ばれる世界一周旅行を目的とした旅行者も大勢日本を訪れるようになります。これは1872年にジュール・ヴェルヌの代表的冒険小説『80日間世界一周』が発表されそれに触発されて世界一周旅行がブームになったことによります。小説で描かれているように、産業革命により交通手段が飛躍的に進歩したことで世界一周が夢ではなくなっていたのです。

羅針盤により大航海時代を迎えたように、19世紀半ばには各大陸で鉄道網が整備され、蒸気船による定期航路が各大陸を結び、多くの旅行者を海を越えて運ぶようになったのです。1837年に英国王室の勅許を得て設立されたP&O汽船会社（*Peninsular & Oriental Steam Navigation Company*）は、1860年にヨーロッパと日本を結ぶ定期航路を開設していますし、カナダ横断鉄道を敷設したカナダ太平洋鉄道（*Canadian Pacific Railway*）は、1886年に東に位置するモントリオールから西海岸のバンクーバーまで鉄道を延伸させると、翌1887年にはバンクーバーと横浜を結ぶ太平洋航路を就航させています。

実際にこの航路を利用して横浜へ到着したアメリカ人女性旅行家がいます。彼女の名はルイーズ・M・ウィリアムス（【図5】左の女性）で、前年6月15日に発生した明治三陸地震から約1年後の1897年8月ごろ来日すると、横浜を皮切りに、東京、日光、箱根、京都、神戸、長崎を訪れています。彼女は律儀にも、ショップカードや領収証、配送物の送り状など、このときの旅行で手に入れた些細なものも含め旅行の記念として手元に残していたのです。

彼女は来日すると横浜グランドホテルに宿泊しています。日本の陶磁器や工芸品に強い関心を持っていたようで、横浜にあったマツイシヤという陶磁器販売店を訪れています。また、表紙に蒔絵細工が施されている写真アルバムを購入したりしていることがわかります。彼女に限らず日本の陶磁器や漆器は欧米人に好まれたようです。横浜では、宮川香山（みやがわこうざん）が手がけた、陶器の表面を浮彫や造形物で装飾する「高浮彫」という技法を駆使した眞葛（まくず）焼が輸出

【図4】ホーズ 横浜周辺外国人遊歩区域図 1869年ごろ　【図5】ウィリアムス女史日本旅行記念蒐集資料の内 集合写真 1889年ヵ

◀【図6】横浜写真アルバム 1890年代頃

◀【図7-1】同 江の島 1890年代頃

▶【図7-2】同 鎌倉の大仏

▶【図7-3】同 宮ノ下 富士屋ホテル

品として海を渡っています。さらに現在当館で開催中の特別展「近代輸出漆器のダイナミズム―金子皓彦コレクションの世界―」からもわかるように、明治時代になると大量の漆器が輸出品として欧米へ渡っていきます。欧米人にとって漆器は大変興味深いものだったようです。

なお、彼女がどのようなアルバムや写真を選んだのかは、残念ながら現物が残っていないためわかりません。しかし、一般的に当時外国人に人気だったアルバムの表紙は、富士山、帆掛け船、人力車【図6】など「日本らしい」意匠が施されたものだったと思われます。また、アルバムに収めた写真からも、当時の訪日外国人が関心を持っていた場所がどこであるか推測できます。おもだったものをあげると、江の島【図7-1】、鎌倉【図7-2】、箱根【図7-3】など、今日日本人、訪日外国人を問わず人気の観光スポットであることがわかります。もともと江戸時代の人々にとっては信仰の対象であり、物見遊山の対象であった場所は、伝統を積み重ねながら、時代を超えて今日も多くの人びとの関心を集める場所になっているのです。

日常と非日常

私たちが暮らす〝日常〟の場は、異国からきた人々にとっては〝非日常〟の空間です。私たちが日常の場を離れ、異国へ旅したときに感じるのと同じです。〝日常〟になれてしまった者にとっては当たり前であるものが、当たり前ではないからこそ、強い関心を向け記録に遺そうとするのです。

私たちが当たり前であると感じていることを、他者のまなざしを通して再認識してみてはどうでしょうか。

（主任学芸員・嶋村（しまむら） 元宏（もとひろ））

特別展
かながわへのまなざし

開催概要

会期：2024年8月10日（土）～10月6日（日）

休館日：毎週月曜日

〔8月12日、9月16日、23日（月・祝）は開館〕

※9月10日（火）は特別展示室のみ休室

会期中に作品・資料の展示替えを行います。

2024年は2つのコレクション展を開催！

2023（令和5）年4月1日、「博物館法の一部を改正する法律（令和4年法律第24号）」が施行され、1951（昭和26）年に制定された博物館法が約70年ぶりに大幅改正されました。この改正では、博物館には従来の社会教育法に加えて、2017（平成29）年に制定された文化芸術基本法の精神に基づく役割が新たに付されています。また改正内容としては、博物館登録制度の見直し、さらに事業の中に電磁的記録（デジタルアーカイブ）の作成・公開が条文に明記されたことなどが、大きな点といえるでしょう。一方で、博物館とは何かという定義については、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集、保管、展示し、併せて資料に関する調査研究をすることを目的とする機関であるとされ、これまでどおりにその活動、事業については不変のものとして位置づけられています。

さて博物館にとって資料の収集は、重要な活動です。特に地域博物館にとって、その地域の歴史や文化、自然等を調査研究し、展示で広く紹介するうえで欠かすことができないのが資料です。その資料の価値を調べ、収集すべきかを判断するのは、学芸員の仕事であり、その責任は重いといえるでしょう。このように博物館の眼、学芸員の眼によって貴重な資料が収蔵されコレクションが形成されていきます。そのため、コレクションはその博物館の一つの顔であるといっても良いかと思います。また収集の形態も、購入や寄贈、採集、あるいは路傍の石造物や他館が所蔵している資料など収集困難な場合の複製物の制作などさまざまです。なかでも地域博物館では市民からの寄贈という形態が多く、これは日頃からの博物館と市民との信頼関係の上に成り立つ収集であり、非常にありがたいことであると思います。

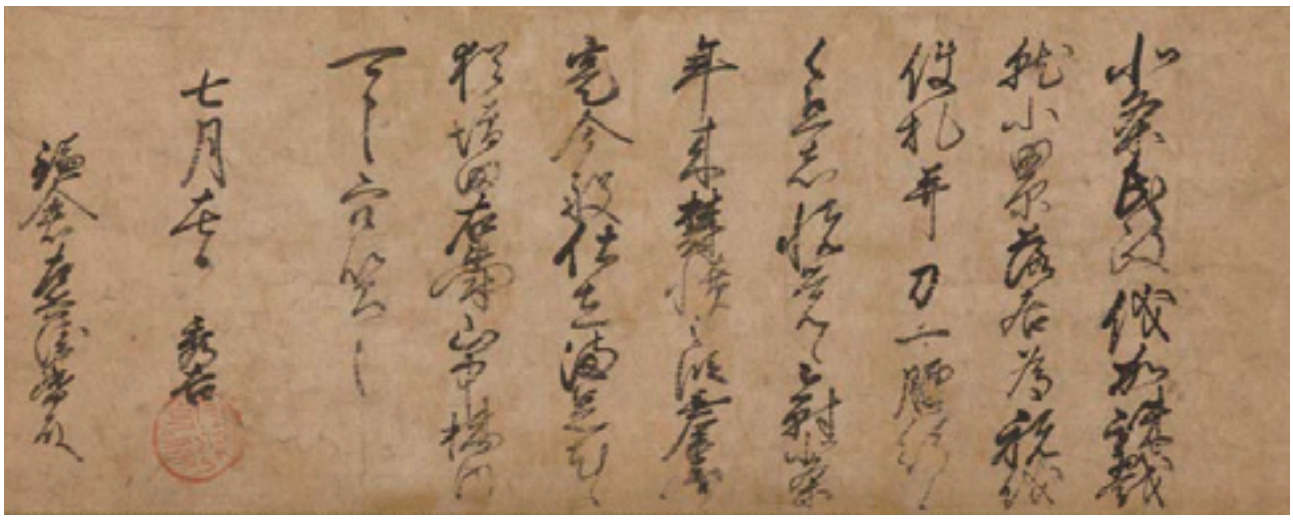
当館では、資料の収集要綱のなかで、「県立の博物館として、主に展示事業、調査研究事業に資するもの」を収集するなどその基本方針を定めて、活動しているところです。現在当館が収蔵している実物資料は約6万6000点にのぼります。そのコレクションを一堂に公開することは困難であることから、当館では以前からコレクション展と銘打って、収蔵資料を様々な切り口から紹介する展覧会を総合テーマ展示（常設展示）とは別に開催してきました。

そこで2024（令和6）年度は、近年収集してきた資料を中心に2つの企画からなるコレクション展を開催すべく準備を進めていますので、ここではその一端を紹介したいと思います。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

まず第1弾として7月20日から9月16日の会期で開催を予定しているコレクション展が「おひろめ！―新しく博物館の仲間になったモノたち―」です。

当館は「かながわの文化と歴史」を総合的に展開する活動を行っていることから、その対象とする時代や分野も幅広く、また対象とする地域も県内全域にわたり、考古資料から文献資料、さらに絵画や彫刻、陶磁器といった美術工芸資料など多岐にわたる資料を収集、保管しています。そこでこの「おひろめ！」展では、ここ近年収集してきた資料のなかからその一部を紹介、展示いたします。この間購入した資料もありま



【図1】豊臣秀吉朱印状

【図 2】横浜指路教会銘板

すが、多くが県民の皆さまの寄贈というご好意により収蔵できた資料です。しかしながらこれまで展示をする機会がなかなかなかったことから、このたびコレクション展として展示、公開することで、寄贈いただきました皆さまにあらためて感謝申し上げたく、この「おひろめ！」展を開催することといたしました。

ここでは展示資料の中から、いくつか紹介したいと思います。

最初に中世の歴史資料ですが、当館ではこれまで鎌倉幕府の御家人など相模国に根差した武士団に関する資料や、また戦国時代に小田原を拠点に関東を支配した北条氏に関する資料を、積極的に収集してきました。今回展示する豊臣秀吉朱印状【図 1】は、秀吉の小田原攻めによって北条氏が滅亡した直後に出された、関東公方足利氏の一族に宛てた文書です。秀吉がいち早く東国を統治しようとしたことが窺える、貴重な資料といわれています。

次に紹介するのは、横浜指路教会銘板【図 2】です。当教会は 1874（明治 7）年に居留地に設立されましたが、1892（明治 25）年に C. ヘボンの尽力によって現在地に移転しました。その後関東大震災で被災し、1926（大正 15）年に再建されますが、横浜大空襲で内部は焼失してしまいます。現在建物は横浜市の認定歴史的建造物となっており、この石製銘板は戦時中から 2019（平成 31）年にまで建物に掲げられていたことから、建物の歴史を語る貴重な資料といえます。

そして最後に紹介する資料は、渡辺幽香の西脇清十郎像【図 3】です。作者の幽香は初代五姓田芳柳の娘で、義松の妹になります。そもそも幽香の現存作品が少ないなか、本作品は非常に精緻に描かれた油彩画であり、価値の高い貴重な作品であると評価されています。開館以来五姓田義松の資料を収集、調査研究を進めてきたことから、本作品も五姓田派の画家の一人の作品として収集されました。

この他にも、「おひろめ！」展では各分野からさまざまな新収蔵資料が展示されます。是非この機会に当館の幅広い活動を知っていただくとともに、未来にわたり守り伝えていくコレクションの妙をご覧いただければと思います。

なお第 2 弾は、「本店本館創建 120 周年記念　横浜正金銀行」というテーマで 11 月 9 日から 12 月 22 日の会期で開催いたします。

当館の旧館部分である横浜正金銀行の本店本館の建物が竣工して 120 年の記念展です。これまで収集してきた資料に、新たに収集した資料を加えて建物や横浜正金銀行について展示します。詳しい内容は、次号であらためて紹介いたしますので楽しみにしていてください。

（館長・望月　一樹）

【図 3】西脇清十郎像　渡辺幽香

コレクション展

おひろめ！

－新しく博物館の仲間になったモノたち－

開催概要

会期：2024 年 7 月 20 日（土）～ 9 月 16 日（月・祝）
場所：1 階コレクション展示室
休館日：毎週月曜日、8 月 6 日（火）
〔8 月 12 日、9 月 16 日（月・祝）は開館〕
会期中に作品・資料の展示替えを行います。

THE けんぱく PUNCH

博物館公用車ドライバーの仕事

神奈川県立歴史博物館には専門の公用車があり、ドライバーさんも実は在籍しているのをご存じでしょうか。学芸員と公共交通機関が近場に無い場所での調査へ行ったり、展覧会前に借用先へ図録用の撮影をしに行ったり、資料を運んだりと、博物館活動において大事な仕事の１つです。その仕事をパンチの守が覗き見しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

パンチの守（以下パ）：あと３か月ほどで次の特別展が始まるのう！　おや、ドライバーさんではないか。今週はあまり姿を見なかったが元気じゃったか？

ドライバー（以下ド）：元気は元気ですが、ちょっと今週は移動が長めでしたね～。

パ：どこへ行っとったんじゃ？

ド：今週は２つ先の特別展の調査・撮影に担当学芸員が行くというので、カメラマンと機材を積んで浜松への同行を２日ほど、その後は次の特別展の準備があって、そっちの担当学芸員と下田まで行ってきました。

パ：おお…なんとも長い移動距離じゃったのう…

ド：もっと色々移動した週だとこんな感じの時もありました。表にまとめてみましたよ。

パ：結構色々な所に行くんじゃな！やはり特別展関連の準備があると、続けて出動することが多いんじゃなあ。

ド：特別展関連の他にも、行事を行っている際の救急対応用の足として控えていることもあります。学校などに打合せに行く際に、レプリカなどを運ぶこともありますね。

パ：そういう場合、授業をする学芸員が手持ちで公共交通機関を使うよりも、やはり車がある方が絶対によいのう。しかし、特に資料を乗せるときには緊張するんじゃろうなあ。

ド：基本的に担当学芸員がしっかりと梱包・固定していて、安心は安心なのですが、ドライバーの仕事はとにかく「運ぶ」ことなので、人も物も何かを乗せる時は気を引き締めて、安全運転を心がけています。

パ：うーむ、その心がけやヨシ！ワターシもちょいとそこまで運んでもらおうかのう！

ド：業務が無ければ運びますが、タクシーじゃないですからね！

	月	火	水
AM	配送物の持ち込み（県庁へ）	配送物の持ち込み（県庁へ）	行事対応（お台場へ）
PM	特別展の準備（小田原へ）	特別展の準備（南足柄へ）	

	月	火	水	木	金
終日	特別展の準備（足柄へ）			小学校にて出張授業の打合せ同行（横須賀へ）	寄託資料を寄託元に輸送（横浜市内へ）

（非常勤学芸員・市野（いちの）　悦子（えつこ））

発行：神奈川県立歴史博物館　https://ch.kanagawa-museum.jp/　X・instagram　@kanagawa_museum
〒231-0006　神奈川県横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和６年５月 28 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN
※本誌画像の無断転載を禁じます